

報



會

會 岳 山 本 日

73

月 二 年 三 十 和 昭

岩波版「日本風

景論」に就いて

小 島 鳥 水

一 昨年の秋岩波書店から、岩波文庫の係り、長谷川潔君が見えられて、今度「文庫」へ志賀重昂先生の「日本風景論」を収めたいから、解説を私に頼むといふことであつた。それに就いて、版權の關係もあるし、先生の令息富士男君の御承引を求むることにして、發行の方の下相談は済んだが、さて私が引き受けて見ると、

本来なら、校訂もしなければならぬが、この校訂には、惱んで手を著けないことにした。それは先生の用語辭、送り假名等が、特得のものであるのみならず、引用の和文漢文洋文、それから古典の和歌等が、極めて廣汎に亘り、それを一々原書原集に照らして、校訂することは、一と通りの苦勞でなく、又植物動物等の和名漢名なども、私の手には、到底負ひ切れないので、斷然あきらめてしまったが、併し「風景論」その儘の原文絶對尊重にしても、豫期しない困難に撞着した。

「風景論」の原書は、第十五版まであるが、著者は本書印刷の餘白を利用して、或は散文、或は詩句、或はコマ繪などを、巧みに追刷調合し、凡てが紙幅本位に按配されてゐるのを、本文の行數も字數も全く違ふ「文

庫」一本に、移植するとなると、子供が大人の衣裳を着けたやうに、袖珍本型の紙幅には受け切れなくなるのであつたが、出來得る限りは、多大の不體裁を忍んで、原書に従つた。又さういふかなかつたところもあつた。圖版も、例へば同溫線風向及天氣之圖、雨量分布之圖等は、縮寫するに於ては、不明瞭となつて、殆ど用を爲さない恐れがあるので、之を割愛した。

さういふわけで、校訂は辭退したが、併し全然、無關心であつたのではない。例へば原本第十五版(或は、そのもとと前版より)挿畫の中に、樽前山と淺間山が、横圖として上下に掲出されてゐるのが、入り繰りになつてゐる、即ち樽前山とあるところへ淺間山の圖、また淺間山と記したところに樽前山の圖が入つてゐる、それ等は正しく入れ替へた。又「日本の生物に關する品題」中に「(十八)菜の花の中に城あり郡山の」の古句に、作者の名を其角としてある、これは第一版には(十四)までしか、なかつたのを、後版に(十八)まで補加され、菜の花の句は、以來第十五版まで、凡て其角で通してある。併し、この句は、其角の作で無いと信じて、念のため句集を検したが、やはり無い、そこで岩波の方の専門家に調べてもらつたら、許六の作であることが確められたので、岩波版では許六と改めて置いた。(岩波版五三頁)

尙ほ私の解説で、言ひ落したこと、を、この際追加して置きたい。「風景論」で今日に適しない記述は、登山案内が、時代違ひのものであることを注意して置いたが(令息富士男君も、その點を顧慮されてゐた)その外に、山の標高も、その時代に行はれてゐた農商務省の地形圖、又は地質圖幅説明書等から採用されたもので、今日の如く參謀本部實測五萬分一圖などが、發行されて居らず、或は實測さへもされてゐなかつた時代だから(殊に信飛山塊に於て)是等は、希くは「山日記」所載の標高表に依り訂正して讀まれて欲しいのである。

それと、も一つ、私の考へが足らなかつたと思ふことは、原版の志賀氏小序即ち「日本風景論」の挿畫は、桶知雪湖君の落筆、洋風畫は海老名明四君の作云々とある明治二十七年十月十八日付の一文を收録しなかつたこと、及び「日本風景論」第三版印刷中二十八一年一月十三日小金ケ原を過ぎて「利根川圖志」を讀む云々の小品文を脱落したこと、(この文の一部は私の解説に引用したが)この二文は鶏肋の感ではあるが、二頁として追刷補加すべきものと思つてゐる。殊に後者に至つては「利根川圖志」を、簡單ながら世に推奨し、またラスキンの名まで、出してゐる。

後學年少の私が「圖志」の作者赤松宗且を識り、ラスキンを知つたのは、實にこの一小文であつた、赤松宗且

のことに就いては、「會報」本年一月號に、行方沼東君の記述があるが、私は同氏の文に依つて、教へられるところ多大であつたことを悦び、且つ感謝するものである。

最後に「風景論」に直接關係は無いが、一寸申し添えて置く、明治四十三年一月十六日、志賀先生の好意で、日本山岳會の第四回新年晚餐會が、代々木の四松庵(先生の別墅)で開かれたが、その時、學校制服の少年が、先生の傍にゐられ、先生からの紹介に依つて、本年十三歳となられた令息富士男君であることを知つたが、後に同君に依つて「志賀重昂全集」八卷が發刊され、又今回の岩波版發行に就いても、私の解説中、先生の傳記に就いて是正していただいたのは、不思議の繋がりである。晚餐會の當夕、列席された諸名士の中で、物故された諸氏に、山崎直方、小倉伸吉、白井光太郎、大下藤次郎、田山花袋諸君の名を擧げるとは、哀しいことである、(四松庵晚餐會より二十八年後の昭和十三年一月十六日夜、本文を作る。鳥水)

附記 岩波文庫「日本風景論」が昨年一月十五日に發行されたのも、偶然、四松庵の集まり日の、前日に當つたのが妙である。

× × ×

會費拂込みを願ひます

ウキンパーの刻んだ日本の風景

武田 久吉

ウキンパーが彼の本業でもありまた得意とした處の技術で、日本の風景を刻んだことについては、嘗て小島烏水君が詳細に記述された『書齋の岳人』(一二五頁以下)。

あの世界的登山家が、その晩年に日本にこそ来なかつたが、他人の注文で、我が國の風景數十枚を刻んだといふことは、彼の有名な登山記以上に、彼を吾々に親きものにする。

小島君によると、ウキンパーの彫刻した畫のある書物の出版は、年月不明であるが、その本文を繙読した處では、日清戦争から数年以後の作だといふが、その中の繪は、幕末から明治中期にかけての景であるそうだから、小島君の推測の如く、この本の出版に方つて、特に調製したものであるのかとも知れない。

何はともあれ、この『日本漫遊記』の序文によると、挿繪はエドワードウキンパーの彫刻と斷つてあるそうだから、『アルプス登攀記』の著者の手に成つたものであるに相違あるまい。處がウキンパー彫刻と銘ある日本の風景が、上記の書物以外、尙世の中に存在してゐることについては未だ注意した人が無いやうである。それは有名な旅行家のイサベラ

ード女史(後年結婚してビショップ夫人と呼ばれた)の著になる *Unsettled in Japan* を見ると、巻頭の日光陽明門を初めとして、尙三四のものには明にウキンパーの署名がある。この外にも数枚の一頁大又は小さい挿繪があるが、多くは何の署名もなく、そして彫刻様式は悉皆同一人の手に成つたものでないことを思はせる。又本書の出版は私の藏書には明記を缺くが、序文は一八八〇年九月に書かれてゐるから、これがエドワード ウキンパーだとすれば、彼の壯年期の作品であらう。

處でこの時代に出版された書物で日本に關するものの中に、サーエドワード ジェイ リードが、一八七九年に日本に來た時の紀行を、翌年二冊の書物として出版して *Japan and her people* の見ると、少數ではあるが、矢張りウキンパーと署名のある木口彫の木版畫が挿入されてゐる。然るに、この本の序文を見ると、この方のウキンパーは、有名なエドワードではなくて、とはいへ堪能なる彫刻師の *Josiah J. Whymper* に依頼して、寫眞又はスケッチ等を土臺として刻んだものであると、明記してある。だがその署名は、單にウキンパーとあるだけで、何もクリスチャン ネイムは附いてゐない。従つてたゞウキンパーと署名があるのみでは、それがマッターホルンの勇者であるとは斷ぜられない。

最後に殘される問題は、署名の字體等によつて、それがエドワードか夫共ジョサイアであるか決定出来るかどうかである。バード女史の書物に挿入のものゝ署名は、何れかといへば、サー エドワード リードの本に入られたものゝ署名に類する點がある。夫故これは、エドワードの方ではないと疑へば疑ふの餘地は十分にあるが、小島君によると『書齋の岳人』(一三〇頁) エドワードの方である。ウキンパーが刻んだらう處の、ティンダル教授の書物に挿入された木版畫の中にも、仔細に見ると、少くとも二様の署名があつて、殊にウキンパー自畫自刻とあるヴァインスホルンの繪の文字の如きは、バード女史の著書中のあるものに似通つてゐる。

私はエドワード ウキンパーとジョサイア ウキンパーとの關係について、何も知る處が無いし、又調べて見る機會もないが、兩人共大體に於て同時代の、而も堪能な彫刻師であつたことに誤はないやうである。夫故、一方に於て傳記の調査と共に、他方、ウキンパーの署名ある版畫を多數比較研究して見るのも、無意義なことではないと考へられるので、其だ不得要領な一文で恐縮ではあるが、『會報』の一隅を汚させて戴く次第である。

(一九三八・一・一認)

日本山岳會誕生の年月に就て

冠 松次郎

『昭和十二年十二月の『會報』七一號を見ると、或る集會の席上で、冠氏は日本山岳會の成立を明治三十九年四月として講演されたと自身記して居られる。實の處『山岳』第一年第一號が明治三十九年四月に發行され、その巻頭の設立主旨書には四月五日の日附がある爲め、この時を以て設立されたかの様に考へ易い。だが事實は前述の如くであること、嘗て私が『山岳』第三十一年第一號にも記した通りである。この號を見られない方もあるかといふ懸念も手傳つて今こゝに更めて記すこととした。今後は會員たると否とに拘らずこの點について誤つた考を持たれないことを切望する。殊に役員又は役員たりし方は、發起人であるとないつて拘らず、一切の謬見を捨て去つて戴き度いものである。』

これは昭和十二年一月の『會報』七十二號で武田氏が述べられたものであります。

私は山岳第三十一年二號黒田孝雄氏の『日本山岳會三十年』と云ふ文も、第三十一年一號武田氏の『山岳會の成立する迄』と云ふ文も讀んでをりましたが、どう云ふものかその折に

は左程に感じなかつたのであります。ところが今度會報に私の名が出て、そして「謬見を捨て去つて戴き度いものである」と云はれたのでは、つとしたのであります。私は謬見は去らなければならぬと思つたからであります。

それでは私は何故に、日本山岳會は明治三十九年四月に成立したと云ふたかと申しますと、黒田氏が「日本山岳會三十年」で「(前を略す)山岳會設立の主旨書が發表されたのは明治三十九年四月五日のことであるから、それを以て日本山岳會が公に設立された日と見るべきであらう」と云はれたやうに、私自身もさう考へてゐたばかりでなく、山岳第一年第一號の會報欄の頭初に「本會の成立」と云ふ題で「山岳會は成立した(中略)今同相諮りて本會を建て(中略)こゝに初めて江湖に見ゆるに至りたり(後略)」と云ふ文を見てゐたからであります。

實際山岳第一年第一號を見た方は何人でも山岳會はその時に獨立して成立し、初めて江湖に呼びかけたと思はなかつたものはないと存じます。これは事實の問題で、あの創刊號を續いて見れば、何人もさう首肯さると思ふものであります。

尙山岳第三十一年二號の會報欄の山岳會第一大會の記に「本會創立以來茲に第三年を迎へ云々」と云ふのも見逃せない事柄だと存じます武田氏の御説によれば、明治三

十八年十一月二十五日刊行「博物の友」に、「本會(日本博物學同志會)内に「山岳會」ト稱スル一支會設立サレタリ」と立派に掲載されてあるから明治三十八年十一月に結成されたと見る可きである」と云ふことであります。

更に「山岳會に日本の二字を加へたのは明治四十二年六月に獨立した時のことである」と云はれてゐる。さうすると山岳會は、明治三十八年十一月に日本博物學同志會の一支會となり、明治四十二年六月に、日本の二字を加へ、日本山岳會と改稱する迄、同會の一支會として從屬してゐたこととなる譯であります。

明治四十二年六月に日本山岳會と改稱され獨立したと云ふ箇所へくると、私は何だか變な氣持になつたのであります。

明治三十九年四月創刊號、山岳第一年第一號に、あれほどはつきり「今回相諮りて本會を建て……こゝに初めて江湖に見ゆる……」と書いてあるからであります。

そればかりでなく、山岳第一年第一號から第四年第二號(明治四十二年六月刊行)に至る三年餘の間には、日本博物學同志會の一支會であるやうな記事は一つも見當りません。

山岳第四年第二號の會報欄の頭初には「山岳會を日本山岳會と改稱し云々……」とはありますが、日本博物學同志會から獨立したと云ふことは全く發表されてをりません。

それでありまして、明治三十九年四月以降、明治四十二年六月に至る間に入會された會員の中には、山岳會は日本博物學同志會の一支會であると云ふことを承知の

きな方達と、同じ趣味に立つ他の數名の先覺者とが、山を中心として相集まり、日本博物學同志會の一支會として山岳會を設立し、雜誌「博物の友」へ山の記文を載せてゐた。然

くるに至つた。それが明治三十九年四月頃であつて、四月五日附發起人諸氏連名の設立主旨書となり、雜誌山岳の創刊となり。而してその會報の頭初に「本會の成立」と云ふ經過



新舊理事迎晩餐會紀念

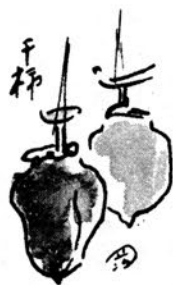
上入會された方は殆どなかつたことと思はれます。それで私の今まで信じてゐたことを申しますと、日本博物學同志會の中の、山の好

るに時勢は山岳會の驟起を促し、この山を愛する先覺者達は、萬難を排してその氣運に乗托し、日本博物學同志會の殻を脱し、山岳會として獨自の立場を以て初めて江湖に呼びか

報告、及び發會の辭風の文字となつて現はれたのであつて、明治三十九年四月こそ獨立山岳會として颯々の聲を發した日本山岳會にとつて極めて光輝ある紀念すべき發祥の日であると思ひます。

右につき小島鳥水氏の御考へは左の通りでありますから、併せて載せさせて頂きます
一、山岳會の誕生年月は明治三十八年十一月(又はその一、二ヶ月以前の頃)
一、愈々主旨書を起草して名實共に山岳會設立の事實を社會に發表し、設立を實質的に確定したのは明治三十九年四月
以上が穩當ではなかつと小島氏は申されました。(冠)

あると信じてゐたのであります。
私は以上のやうに考へてゐたのであります。創立の當初全く山岳會と關係なき者でありますから、若し私の考が誤りであつたならば、その謬見をこの機會に安心して訂正したいと思ひますし、會員の中には私と同じやうな考を以てゐる方々も多分にあると存じますから、その人達にも真相を知らしめたいと考へるのでも、何卒發起人各位の御高見を拜聴致し度存じます。幸ひと現在では發起人の大部分の方が御健在でありますから、かう云ふことには最もよい機會だと存じます。
現今のやうに日本山岳會が斯界は勿論、頗る廣範圍に亘つて重きを爲してゐる時、その創立の年月を明瞭にしておくことは日本山岳會自體として實に緊要なことであり、又會員としても心得おくべきことであると存じます。私自身と致しましても當今はよく日本山岳會の生年月を問はれますから、この際のはつきりとしておきたいと思つてこの稿を書いた譯であります。(昭和二三・一・一五)



嚴冬の奥秩父

茨木猪之吉

山々も薄闇となり雑木山も傷々しい程になれば、中津川は凍り、その下僅かに流れ音も静かだ、連れの男は立寄り、この下が俺の家で荷を置いて區長の所へ御案内するからと降つて行かれる、二三丁行くと橋の傍に小さな雜貨商があつてランプの灯が薄茫然りとして、入口のガラス障子を開けると炬燵に三人居る、區長さんに紹介されて、すぐ表二階へ、少女に案内された、流石に火鉢は猛烈で、湯もたぎつてゐる、早速濃茶を立てつゞけに飲む、勢しは落ち付いた氣持になる。

遅い晩飯は温い、ニウムの鍋がか

けられ青い葱の上に赤い肉は「馬」か

と思つて、聞いたら野鹿だそうで、

そう言へば先程道々の話に四五日前

射めたので未だ少々はあるかも知れ

ぬと言つたが、之れだなあ……と更

に珍らしくもあり初めて食ふので心

配もあつたが柔かく中々甘かつた。

ランプを消して床にもぐり込む、

階下では區長さん相手に話解が頻り

に聞へるが、いつか遠く夢路につく。

寒いので眼を覺す、二階の戸を開

ける、霜が眞白だ、街道は炭俵をリ

ヤカーに、つんで通る、山仕事に

行く若者もあつた、フト屋根下の箱

に大きな木兎が沈黙してゐる、水は

妙なし湯の用意はないので顔も洗

はず、朝飯をそこへ出して出發し

た。

朝の陽は澄み渡り桔梗色の空に岩

山潤葉林は印象的で特に美しかった

この先の仕事場へ歸へる少年と一緒

になり、カンパスを持つてくれる、

六年生の加藤學二郎君だ、中津川峽

の景勝地は之れからだ、別に特別

に興味もないが、たゞ山家の生活や

ら、この峽谷を奥へ奥へ深く行く事

が望みだつた。

道下の日向で主婦が張り物をして

いる、こゝが「中双里」の部落で釣

り橋の對岸には昔ながらの家がま

で大きな石を屋根にのせ如何にも山

國の生活を思はせる、軒下到大鹿の

皮が張つて干してある、先年栃本で

も見たが成る程本當に居るのだなあ

と思つた、幸ひ風もないので三脚を

立てたが群々と寒さが追つてくる自

由に筆が延びないので困つた、それ

でも「槍ヶ岳」と稱する、岩山と冬

山を描く、瘦せて尖がつた赤だが頻

りに吼へるので嫌になる、偶々鑛山

に行く人と道連れになるが時々振り

かへつて眺めたりスケッチをするの

で獨りになる、神流川を越して中津

川の部落が遙に見える、午後の光り

は背後に村の人々にも出合ふので山

里の感が深い、暮れ方例の幸島家の

入口に立つて暫くらくは動く事もし

なかつた。

親切な主婦は奥の離れ座敷は寒い

から茶の間の炬燵に火を入れてくれ

る、爐端に温まつてゐる、大きな鐵

鍋に物凄く骨ばつたものが煮つめて

ある、小供達がたかつて頻りに骨を

シャブツたり肉切れをムシツたりし

ている、兎かな鶏かな、解らなかつた

が土間の脇につるした未だ生々しい

野猿の皮が張つてあるので、さては

エテ公かそれにしても大猿だつた、

主婦は提灯を下げて風呂場へ案内し

てくれる、星が降るようだ、明日も

晴天で何より有難たいと喜ぶ。廣い

居間の片隅の炬燵へおさまつて例の

猿のスープで煮た大根汁は少々不氣

味だつたが饅頭の御馳走よりは好奇

心をそそつて、ランプの下での温か

い晩飯はうれしかつた。

暗い室にはお正月の書き初めが一

面に張られ「明るい日本」「はつ日の

光」皇統何々の漢字は五年生か、鹽

鮭が數十プラ下り賣藥の袋も時代色し

て同じく、神棚には松の枝に蜜柑を

さし、時々子供がねらつてゐる、著

音機は進軍の歌や流行歌もまざつて

ギイ／＼やり出す賑やかさで如何に

も田舎のお正月の樂しさを感じる。

こゝから猶ほ奥深く三國峠越し、

信濃澤で雪も深く凍つて尾根の登り

口で頗る困難して信州「梓山」へ出

たら急に文明開化となり明るくなつ

た。

行つたやうな慘なことも一二度あり

ましたが旨くゆくと大抵更に實劍迄

足をのびしてゐます。又或る年の十

月末(憶か昭和六年)朝七時に駒の

上に立つた獨り歩きの足早さから、

藥莖頭の鞍部を當時未だ知られてゐ

ない正澤谷本谷へ降つたこともあり

ます。そのときはその少し前に京大

の人達によつて紹介せられた細澤の

大瀧迄滑つて来る餘裕があつた程で

した。

これ等の山の他に同じ山脈中に今

度行つた摺古木山(二二〇〇米)を

更に加え得たことは大きな喜びでし

た。この山は南駒と惠那山の中間に

あり、三留野から伊那飯田行き乗合

バスの途中大平から半日で登れる山

です。

減多に得られぬ二日間の休みに惠

那山へ登らうと思つたのを、途中か

ら氣をかえてこの見棄てられた、し

かも大變とりつき易す相なこの山に

行きたくなり、又それを眺望すること

の私に大好きなあの豪宕な赤石、

聖の連嶺を出来る丈眞正面から一目

眺めたかつたからでもありました。

二日は路探しに宿に荷物を放り出

したまゝ谷の奥へアザミガ岳(二〇

二七米)との分岐點迄滑り、夕方は

村の東方の一四九米へ葎をかきわ

けて折柄眞西に夕焼ける赤石、聖

を飽かず眺めて暮しました。二三日

六時出發。摺鉢山(二一六八米)か

らアザミガ岳へ廻る積りで本谷の右

谷を登りましたが小さな瀧の連續に

飛び出してしまつた、お正月の事で

秩父電車は土地の人々に満員だつた

が三峯口に着いてバスに乗り換へ大

輪までには客は少なかつた、いつも

乍ら、この街道は錆が在つてよろし

い、冬の陽はもう傾いてゐる、崖下の

農家も戸を閉め切つて人氣がない、

晴天つゞきで埃りほいが青水が凍り

ついて道路に流れ出しつて、難な

い、「落合」かその先の「鶉平」で泊

つもありだつたが、時間は充分あるの

で先へと急ぐ、恰度一緒になつた道

連れは鹽澤へ歸へる人だつたので種

々訊ねたら旅舎はないが農家で頼め

ばいくらも泊めてくれるとの事で元

氣を出して歩む、道々この奥の鑛山

が最近某會社の權利になり事業を旺

んに進めて坑夫も大勢這入つてゐる

とか村で出征兵士が二名召集され

たとか執れも土地柄の話だつた、遠い

新刊紹介

Hugh Rutledge: Everest: The Unfinished Adventure.

17.5×26 cm. pp. 288. Maps 2. Photographs 63. Hodder & Stoughton. London. 1937.

は一寸でこすりました。何分雪がカ
ン／＼にしばらく靴のエッジをてん
で受けつけませんので。アイゼンと
ビッケル代りに途中で拾った木の枝
にものをいはせて摺鉢山に十一時。
生憎頂では猛烈な吹雪。摺鉢木も二
つ難も見えるものかわ。暗れてをれ
ば駒連峯に御岳への眺望が素晴らしい
樂しましたらうに。暖い谷間に逃
げこむと今更縦走する氣も起らず尾
根をこえて瀧の無い左谷を降りまし
たが降りには速いもの、リニツクサツ
クの中の目撃時計が引返す豫定時刻
の一時をユーモラスにけたゝましく
鳴る頃には東澤もすぎて炭焼きの親
爺と戦争の話に花を咲かせてゐまし
た。一時半歸村。直ちにバスに乗つ
て歸京。

期待してゐた御料林の名にし負ふ
蛭の棲家といはれたこの山の樹林も
製紙工業の材原として全く無慘に伐
り荒されて(東澤の出合迄はトロッ
コ道さえついてゐます)今は頂上附
近を残す外山殆んど篠山となつて
ゐます。私の行った時は生憎全国的
な暖氣と降雨の爲に村で雪量一尺餘
り、且終日靴で歩きまわりましたが、ノ
マルな天候では此頃充分スキーが樂
しめる山だと思ひます。
南アザミガ岳(登る谷(イイサコ))
から本谷が更に上で左右に岐れる迄
は地圖に示されてゐるよりも可成り
遠い様です。

(三八・一二五)

れるので、この "The Unfinished Adventure" は過去四冊のエヴェレスト・クラシックスと肩を並べて立派に存在し得ることを知つてむしろ驚いたのであつた。

この本ではラトレツチ隊長は第一部の Narrative を自ら執筆し、第二部の Observations では左のやうな分擔で夫々報告を行つて居る。

氣象 W・R・スミジ・ウインドハム
健康 G・ノエル・ハムフリス
生理 C・B・M・ウォーレン
酸素 C・B・M・ウォーレン
無電 W・R・スミジ・ウインドハム
採集 G・ノエル・ハムフリス
エヴェレストの地方名 E・G・H・ケムブソン

そして第三部には今迄の報告では各處に挿入されて居た寫眞を一まとめにしてすばらしい寫眞六十三葉を網版で片面印刷とした。

この寫眞を Portzelli として纏めたのも、まづこの本を纏いてオヤと思つたのはタイトル頁の前の七頁にわたる隊員の變むちやならぬ顔の鉛筆素描であつた。これが隊員オリヴァの餘技であるとは目次を見て知つたのだが、この特色のある頁を讀いてまづこりや今度の報告も相當なものだぞと何とはなしに考へたのであつた。それ程この素描の頁には何とも云へぬ、氣分がたゞよつて居る。

ラトレツチ隊長の筆になる本文を讀んで行くと無理難題な世論に對する

ヒマラヤに於ける特記すべき山行

"Auf Kundfahrt im Himalaja"
von Paul Bauer-Sinichlu und Nanga Parbat—
Tat und Schicksal deutscher Bergsteiger

最近パウアーは英のスマイスと競争してゐるのかどうか知らないが盛んに本を出す、スマイスの場合は又かと思ふ事がよくあるがパウアーの場合は決してそんな風に考へた事がない、之は矢張り其の地味な書き振りにあるのぢやないかと思ふ。

さて今度のパウアーの著たる此の "Auf Kundfahrt im Himalaja" は其の副題にもある通り一九三六年に於けるシニオルチュエの登頂と一九三七年のナンガ・バルバート事件の全體及びシンヴウ群衆の一角たる北東峯(六五四五米突)に突撃した時の事情等が主たる内容となつてゐる

のでシニオルチュエの方は昨年のナンガ・バルバートで取えなき最後を遂げた隊員中のギンタ・ヘツプ及びカール・ヴィーリンの日記を基礎に、ナンガ・バルバート事件の方は大部分ウルリツヒ・ルフトによつてゐるものであるからパウアー著といふより編と云つた方が正しいかも知れない。

フレッツシュフィールドによつて「世界で最も美しい氷の山」と折紙づけられたシニオルチュエ(六八九一

(島田)

米突、それが凡ゆる角度から撮影されて吾々の眼の前に現はれたのは此の書を以て嚆矢とするであらう。第四十四番目にあるアドルフ・ゲットナー（彼もナンガに逝つた一人だ）とカール・ヴィーンの二人が三角頂の一面を蟻の様に登つて行く寫眞、削ぎ落した様な左側の氷壁、細い氷稜につけられた二人のシュブール、澄み切つた碧空に捲き上る主峯の雪煙らしいもの、山を愛する男として此の寫眞を見て胸に迫る何ものかを感得ぬ者があらうか、ヒマラヤへ行く望みはなくともこういう寫眞をじつと見て居て目頭の熱くなる自分は矢張り幸福な人間の一人である事をつくゝと感謝するのである。

最後のナンガ・バルバートの章は前にも云つた様に昨年行はれたものゝ全體的な報告であつてパウアーの手記は一部日本の新聞にも連載されたと覚えてゐる。シムラ發のロイター通信を信ずる事の出来なかつたパウアー達の心境には實際同情せざるを得ぬ。

兎に角此の本は一九三六年に行はれた世界で最も美しい氷の山としてのシニオルチュー登頂と世界山岳史上最も悲惨なる出来事となつたナンガ・バルバート獨逸遠征隊の最後までの経緯を知るには最もいゝ本である事をこゝに付け加へて下手な紹介文を終らうと思ふ。（吉澤）



會員通信

上海戰線より

今年は大部寒むさうですから楽しい冬が過せる事でせう。小生数日間の船中の生活を終り某地に上陸。

暖いと思つた當地も大陸的に夜間は相當冷込み、羽根入のシュラフザツクや眞細のチョッキ、スキー手袋靴下等山の道具が大いに役に立ちます。

只今當地の有名な建物の附近に宿

營、某アバートの跡を占領南面の玄關口に日向ボツコをしてゐます。仕事のない時は實にノンビリしたもので、砲聲もなく、素晴らしい靑空に時々我が飛行機が快い音を立てゝゐるのみ。諸兄の御健康を祈りつゝ。

十三年一月七日 蕭信

上海派遣軍 岡本 勝二

富士山

拜啓 先日は久し振りにて會員大會に出席、和やかな氣分を満喫歸宅致候。十二月三十一日富士山行出發

元且吉田口五合目泊。二日稍々強風中を登頂、十二時三十三分久須志神社に參拜。頂上にて落合ひ候松浦、佐々木兩氏と共に八合目まで一緒に下山、七合目邊より大暴風に追はれつゝ放々の態にて小舎に歸着。三日下山。甲府附近より望める夕陽の富士は一際回想の念をかき立て申し候

一月十日 小池 文雄

正月の富士行

會員額田敏、長沼重兩氏と共に、正月二日より四日 吉田口方面より富士山に山行を試みた際の状況を通信致候。

一長沼氏十二月二十九日先發、運搬の任に當り荷物を小御岳神社附近に擔ぎ揚げ、額田氏と小生は元日出發二日五合小屋にて長沼氏と會し午後三時頃神社より約一〇〇米登りたる地點に TENT を張り談笑に夜を更し候（氣温は最低零下十八度）

三日は TENT 滞在、朝吹きすさぶ風の合間に小島の啼聲を一二回聞き及び申候、この夜も遅くまで談じ聊か睡眠不足と相成候（最低零下二十度）

四日頂上めざして出發、寒氣強き快晴に、小御岳流を約三〇五〇米迄溯り左岸に出づこの附近より寒風漸く猛烈となり數々吹き飛ばされ相になる、我慢して約三、四〇〇米までねばり候ひしも遂に閉口たれ引返し申候、富士山としては決して激しき風とは言ひ難かりしも、最も風當り強

きルートを採りし爲か或は小生等の心臓弱かりし爲か兎に角見事追返され申候、歸途三〇〇米附近にて故意の滑落によるザイル確保の練習若干、ビツケルを雪中に突きさしてのジツヘルは大したる傾斜でなくとも、殆んど效果なきことをつくゝ

感じ申候（最低零下二十二度）

五日常念まで遠望さるゝ好天氣荷をまとめて下山致候。

TENT は前室付屋根形三人用大部二分重張となせるも夏季用を改造したるあまり上等ならざるもの、下敷はコルクマツトレス或は毛皮、炊事は石油コンロ及コツヘルに依り、食料品中主食は餅を使用致候殊に外出中晝食には雑煮を用ひ候之はアルマイト製、水の漏らざる容器に雑煮を入れ之を小懷爐と共に袋に納めたるものにして五六時間は相當の温度を保ち何時もパンを充分に食し得ざる人にとつては登攀中の晝食方法としてかなり有効かと存候。

單に幕營三晩にして、引揚げしは聊か物足りなき感有之候ひしも、時局柄餘暇の得られざる昨今之も止むを得ざることゝ諦め申候。

名須川 渡

冬山通信

皆様、お互に非常時局下で御多忙の事と存じます、それでスキーや山に登るにも多少心がひける様で、興味本位の處は成るべく避け度い様な又その様にしなければならぬ様な氣

持も致します。そこで北支邊りで活躍されてゐられる將兵其他の人々の寒苦を思ひ浮べるに充分な、一つは以て銃後の心身訓練ともなる様な處を考へました末、富士山へ天幕行を試みました。

一月一日から會員名須川渡、長澤重兩氏の驥尾にふして吉田口から小御岳の少し上、森林帯の境に天幕を張り三泊、零下二十幾度と謂ふ寒氣をしみゝと味ひ、且つ富士特有の強い風に晒らされて、想ひを北支、北滿の空に走せ、うたた標を正して彼方を拜み、皆様の武運長久をお祈り致しました。

會員の多くの方が御國の爲め、彼の地で、且つては山で鍛へられた鐵の如き熊の如き身を以つて大いに活躍されてゐることを思ふ時には、不幸我等兵隊になるの資格なきものはまことに慙愧に堪へられませんが、而し萎縮してはならぬと、歳とれる身をも省みず、この様な事など致してせめてものあきらめとし、又、銃後の訓練にと、心掛けてゐる次第で御座います。

皆様の御奮闘を祈ります。

額田 敏

美ヶ原から蓼科高原

正月はあまり人ごみのしないところへと思つて、美ヶ原から霧ヶ峯、蓼科高原へ軽い山稜のスキー・ハイキングに出懸けて参りました。美ヶ原へ登るには澤山のルートが

ありますが、私は最も近く、最も安全な、上和田から野々入川沿ひのルートを選びました。この道は吹雪の日でも決して危険がありません。(上和田から山小屋まで十一・五斤)。

山本小屋には美ヶ原の開拓者、山本俊一老がとろろを巻いて居ります一轍だが、それだけ熱心で親切な男です。我々にサーヴィスする爲めに豚を一匹背負上げて、壽喜焼をしてくれました。そうですネ、あれでお客様が二十名近くありましたでせう。開山以来初めての賑かなお正月だと申して居りました。

気温が寒く、毎日零下二十度前後でした。ですから雪質も極めて良好です。三日に上つて、四日の日は王ヶ鼻から武石峰の方へ遊びに行つて参りました。多少風はあつたが素晴らしい天気でしたので、午後一息入れてから物見石山へ出掛けました五日は稀に見る日本晴れで、それこそ微風だにない程かな日でした。

我々は豫定通り、茶臼山から扉峠・三峰山を経て和田峠への山稜を漫步いたしました。未だ雪が足りない爲めに岩の露出したところが一、二箇所ありましたが、何しろあたりの展望が素晴らしいので各山の氣分を満喫することが出来ました。我々山の好きなものには美ヶ原から武石峰・袴越山・澁池・浅間のコースもよいが、この和田峠への山稜漫步も中々捨て難いものがあります。

和田峠では東餅屋の山久旅館？

で一泊いたしました。おぼさんが遠慮しながら出して呉れたトロ、薯は本當に美味しかったです。

六日も亦よい天気でした。和田峠から防火線通りに鶯ヶ峰に取付きましたが、頂上直下は相當な急傾斜のところへ、ガリ／＼の雪で一寸難澁いたしました。八嶋池の小屋で中食を済し、嵐の去つたあとのやうに静かな車山に登つて大門峠に辿りついたのが、彼れこれ三時頃でしたらうか。ゆくりなくも川崎吉藏氏に出逢ひ、話をしてゐるうちに腰が落付いて到頭その晩は萬仁武小屋のお客様となつてしまひました。主の萬仁武は舊知の間柄とて大分遅く迄話し込んでしまつたです。

七日の日は風は強かつたが晴天だったので、八子ヶ峰に登つて親湯へ降ることにいたしました。八子の頭はガリ／＼雪で、その上身を切るやうな風に吹きまわりましたが、眺望は素晴らしいものでありました。バスは冬の間だけ小齊ノ湯から出ます。それも一日一回(午後三時十分發)だけとは心細い次第です。湯川まで降れば、もう少し早いバスに乗れるときかされて急ぎましたが、矢張りだめでした。それでも、その日の中にどうやら東京へ歸りましたから、どうか御安心下さい。

中村 謙

正月の伯耆大山だより

暮の三十日頃から正月にかけて、

關門を渡つた北九州方面のスキーヤーは殆んどが山陰線を経由して大山へと入つて居ます。信州方面へ遠出する連中はこの正月皆無と言つていゝようです。軍事工業の中心である北九州の工場では時節柄正月といへ永い休みが許されないため、手近な大山へ集中する結果となつたのでせう。だから腰を据へてゆつくり練習も出来ず、一定のプランを立てゝ裏大山方面を攻撃するといふパアティも、八幡から一組入つた以外は聞きません。

そんな状態で一時に押寄せた連中も切つて三日頃には大半が下山して居ます。

大體どの斜面のスキー場も元日前後は積雪が少く、愉快な滑降は望めませんでしたが、昨年の雪飢饉と一年間の雪への思慕は幾分でも満たされた様です。

元日は榊水側から頂上に向ひましたが今年は今迄にない難行でした、天候も中腹以上は濃霧で寸刻も露れず憂鬱でしたが、これは毎度のことで承知はして居ましたものゝ、この斜面雪が少くそれに軟雪で、灌木の頭も没しきれず、ブツシユはスキーに捲付いて、それかと言つてアイゼンのはどくぬかり込むし、むしろ輪カンデキの領地と思ひました。とうとうスキーを頂上小屋まで付けたまゝでした。

小屋内の温度は水點下四度半で外は七度半といふ案外な高気温でした

豫定よりづつと時間を費したので三針峯までのプランは捨てねばならなくなりました。小屋から剣ヶ峯までの瘦根も膝までぬかる新雪で、ズルズル北壁側へすり落ち相でアイゼンの快味もありませんでした。

まつたく大山は化物だといふ言葉に登る度に感じます。或る年の元日は暴風で頂上附近はカンカンに凍つてアイゼンも立たない處があつたり

また一昨年などはスキー場のすぐ上からアイゼンを付けて登り、降りも気温が上らず、アイゼンのまゝでスキー場までスキーを擔いで降りたり

谷には大きな雪崩が出てゐたり。ヒステリックな日本海の季節風はこの海岸線の山にそのまゝ表情されてゐるらしいのです。そして今冬の氣狂ひ天気はその極に達して、まだ冬も初めの十二月六日、山陰山岳グループの精鋭三名までが、その悪天候の犠牲となつてゐます。

その頃鐵道省の大山山の家が出来上つたといふのも、何か化物の仕業のような氣もするし。

一度雪が解けて夏山となると、一方ではお花畑の公園の山となり、奥大山方面は雪焼けた、灰色のボロボロの肌が、岩とも土ともつかず、岩場のない處と壁が、おどろけるように登山者を恐がらしてゐる、地獄谷に入ると八月の盛夏といふに残雪が谷を埋めてゐたり。此處にも化物大山の姿があるのです。

暮から大山に入つてゐた、八幡の

元氣な若い岳人社の一隊が、問題の三針峯の北壁を元日に完登出来たと歸つて來ました。 橋本三八

北京 便り

Trackers は北京で買いました。今度はどうなるものを出すかと楽しみにしてゐたんですが、矢張り堂々たるものですね、又してやられたといふ感じがします、北京も近頃は安住の地でなくなりました、井田清、今井田研二郎などゝ云ふ連中が現れては荒して行きます、その上伊藤屋は天津にゐる時々ゲリラ戦術をつかひ、手近には中屋健式あり、この間東京に引揚げた岸偉一君や、津浦線に入る入江保太、慈恵醫大の杉本山岳部長等々の面々を加へると會員優に十人を超える始末、その上に驚く勿れ黒田夫妻の御入來です。

昨日は白宮で赤堀博士と遊び、中屋も一緒に探検熱をあげました。「ヒマラヤは北支からなどいふスローガンをかゝるのはどうですか？ 蘭州の向ふは、もう青海西藏、大したことはないやありませんか、近頃は Sir Eric Teichman の Journey to Turkistan の Stein & On Orient Central Asian Tracks などいふものを抱え乍ら時に支那の古本屋であの邊の文書や地圖を漁つたりしてゐます。やつぱりシヤチコ立ちの犬の類でせうか、北京の正月は寒い乍らも朗かでありました。

一月六日北京

松方 三郎



會務報告

一月定期理事會

(新舊理事送迎晩餐會)

恒例の新舊理事送迎晩餐會を兼ねて一月二十七日芝田町つかさ俱樂部に於て理事會開催

出席者

吉澤、石原(以上新理事) 小島、

高頭、島田、加藤、西堀、高橋、木

村、茨木、島山、冠、黒田、角田

一、山岳編輯の件

一、會計報告及本年度豫算の件

一、小集會の件

一、ウエストン胸像に關する報告

一、山岳語彙集に關する報告

役員の事務は左の如く決定

庶務(黒田)(藤島) 野口

會計(島山) 茨木

山岳 吉澤、島田、西堀、宮崎、今

西

會報 早川、石原

山日記 角田、高橋

圖書 島田、(黒田)

(關西理事) 今西、津田、宮崎

第八十三回小集會(關西)

十二月十日夜大阪市堂ビル清交社に於て本年最終の小集會を催し、次の講演があつた。

一、内蒙古紀行 加藤泰安

一、カラコラム横斷 本多惠隆師

加藤君は今夏内蒙古地方に旅行されたが、その中の見聞を約四十分間話され、本多師は明治三十四年大谷

光瑞師に従つてロシヤ、トルキスタ

ンから新疆省に入り、カラコラム山

脈を越えて印度に出られたが、その

時の模様を一時間半に亘つて詳細に

話して下さつた。三十餘年前の旅行

談ではあつたが、外國書を通してこ

の地方をわづかに想像してゐた我

々に、同胞の人から親しく且つ詳細

に當時の模様を聴くを得たのは洵に

幸であつた。

出席者左の通り

木原均、竹内佐郎、小川正十郎、水

野祥太郎、中原繁之助、富田健一、

山中正之助、前田光雄、岩崎敬治郎

津田周二、宮崎武夫、西岡一雄(以

上晩餐會及講演會出席)

松岡英男、桔梗谷治、今西壽雄、

金谷簡二、中村勝郎、金井健二、淺

井東一、河江正造、木藤精一郎、小

林善四郎、若城豐次郎、辻谷幾藏、

下川友記、松岡靖一、高橋建治、藤

木九三、松井久之助西井常造、村井

榮一(以上講演會出席)外會員外七名

新入會員

會員番號 紹介者 住所氏名

新潟縣南魚沼郡湯澤村

一七二八(角田、黒田孝)嶋村勝彦

退會者

昭和十三年一月中旬

一三二二 岡山縣 龜山雄四郎

一六五六 東京市 安田敏夫

新着圖書

ケルン 一月號 同 編輯室

山小屋 同 朋文堂

登山とスキー 同 其社

野鳥 同 日本野鳥の會

寫眞月報 同 小西六本店

ツリースト 同 J・T・B

地學雜誌 同 東京地學協會

山岳資料 十一輯 關東山岳會

噫! 句坂正道君(遺難報告、追憶)

第五高等學校山岳部

The Alpine Journal No. 255

The Geographical Journal 12

Mazama 12

The Prairie Club Bulletin 12

Trail & Timberline 12

Appalachia 12

The Mountaineer 12

Natural History 12

De Bergsids 12

Ia Montagne 12

Revue Alpine No. 313

Rivista Mensile C.A.I. 12

Le Grigne 1937

Odle Sella Marmolada 1937

Planinski Vestnik 11-12

Bulleti C.E.C. 10-11

S.T.F. No. 8

購入圖書

Wills:—

Wanderings Among The High

Alps

Bauer:—

Auf Kundschaft im Himalaja

山岳第三十二年第二號豫告

ナンダコット日記 立教大學山岳部

ガルワル登攀史 黒田孝雄

カラコラム紀行 宮崎、森譯

コンウエイ評傳 高橋文太郎

會務報告其他

總頁約二五〇頁

寫眞約一五枚

發行期日三月下旬

昭和十三年二月十五日印刷
昭和十三年二月十六日發行

發行兼編輯者 角田 吉夫

發行所 東京市芝區榮平町一(不二屋ビル)

電話(四五)一六四九

東京市芝區榮平町一丁目十三番地

印刷者 植田 庄助

印刷所 成文堂印刷所